

菊あわせ

泉鏡花

青空文庫

「蟹かにです、あのすくすくと刺とげのある。……あれは、東京では、まだ珍らしいのですが、魚市をあるいていて、鮎ふな、鰯ぼらなど、鰻魚かたうおをぴちやぴちや刎はねさせながら売っているのと、おし合つて……その茨いばらがに蟹かにが薄暮方うすくれがたの焚火のように目についたものですから、つれの婦おんなども、家内と、もう一人、親類の娘をつれております。

——ご挨拶をさせますのですが。」

画工、穂坂ほさかいつしや一車氏は、軽く膝の上に手をおいた。巻まきた 蓑たばこを

火鉢にさして、

「帰りがけの些細な土産ものやなにか、一寸用達ちよつとようたしに出掛けておりますので、失礼を。その娘の如きは、景色より、見物より、

蟹を啖わんがために、遠路くつついて参りましたようなもので。」

「仕合せな蟹でありますな。」

五十六七にもなろう、人品のいい、もの柔かな、出家容の一

客が、火鉢に手を重ねながら、髯のない口許に、ニコリとした。

「食われて蟹が嬉しがりそうな別嬪ではありませんが、何しろ、

毎日のように、昼ばたごから——この旅宿の料理番に直接談判で

蟹を食ります。いつも脚のすつとした、ご存じの楚蟹の方ですか

ら、何でも茨を買って帰って——時々話して聞かせます——

寸幅の、ブツ切で、雪間の紅梅という身どころを嚙らうと、

家内と徒党をして買ったのですが、年長者に対する礼だか、離す

まいという喰心坊だか、分りません。自分で、赤鬼の面という

……甲羅を引^{ひっ}からげたのを、コオトですか、羽織ですか、とに角
 紫色の袖にぶら下げた形は——三日月、いや、あれは寒い時雨^{しぐれ}の
 降^やったり留^{ひくれ}んだりの日暮方だから、蛇の目とか、宵闇の……と
 か、渾名^{あだな}のつきそうな容子^{ようす}で。しかし、もみじや、山茶花^{さざんか}の枝を
 故^{わざ}と持^もつて、悪く気取^あつて歩^あ行くよりはましだ、と私が思うより、
 売^おつてくれた阿媽^{おつかあ}の……榮螺^{さざえ}を拳^{こぶし}で割^わりそうなのが見兼^{みか}ねまし
 てね、(箠^{さる}一枚散財^{さんざい}さつせい、一^に銭^{ひやく}か、二^{さん}銭^{びやく}だ、目の粗い
 のでよかんべい。)……いきなり、人混みと、ぬかるみを、こね
 分^わけて、草鞋^{わらじ}で飛出^{とびだ}して、(さあさあ山媽^{やまあば}々が抱^かいて来てやつた
 ぞ)と、其処^からの荒物屋^{かぶ}からでしょう、目箠^{めづち}を一つ。おどけて頭
 へも被^からず、汚^かれた襟^{かぶ}のはだかった、胸^{むね}へ、両手^{りょうて}で抱^かいて来^こまし

たのは、形はどうでも、女ごころは優しいものだと思つた事です。
」

客僧は、言うも、聞くも、奇特と思つたように頷いた。

「値をききました始めから、山媽々が、品は受合うその、山媽々が、今朝しらしらあけに、背戸の大釜でうで上げたの、山媽々が、たつた今、お前さんたちのような、東京ものだろう、旅の男に、土産にするで三尺売つたなどと、猛烈に饒舌るのです。——背戸で、蟹をうでるなら、浜の媽々でありそうな処を、おかしい、と婦どもも話したのですが。——山だの——浜だの、あれは市の場所割の称えだそうで、従つて、浜の娘が松茸、占地茸を売る事になりますのですね。」

「さようで。」

と云つて、客僧は、丁寧にもたうなずいた。

「すぐ電車で帰りましょうと、
大通……辻へ出ますと、電車

は十文字に往来する。自動車、自転車。——人の往来は織るよ

うで、申しては如何ですが、唯表側だけでしようけれど、以前は

遠く視められました、城の森の、石垣のかわりに、目の前に大百

貨店の電燈が、紅い羽、翠の鏝の千の矢のように晃々と雨道を

射ています。魚市の鯛、蝶、烏賊蛸を眼下に見て、薄暗い雲に――

——人の影を泳がせた処は、喜見城出現と云つた趣もあります。

また雨になりました。

電燈のついたばかりの、町店が、一軒、檐下のごく端近で、

おおはまぐり
大 蜃ふきだの吹出したような、湯気をむらむらと立てると、蒸籠せいろう

から簀すの子こへぶちまけました、うまそうな、饅頭と、真黄色な？

……」

「いが餅もちじゃ、ほうと、……暖い、大福を糯もちごめ米でまぶしたあん

ばい、黄色う染めた形ゆえ、菊見餅きくみもちとも申しますが。」

「ああ、いが餅……菊見餅……」

「黒餡の安菓子……子供だまし。……詩歌にお客分の、黄菊白菊
に対しては、聊いささか僭せんじょう上じょうかも知れぬのでありますな。」

と骨ばった、しかし細い指を、口にあてて、客僧は軽しわぶく咳いた。

「——別いちべつ以来、さて余りにもお久しい。やがて四十年ぶり、

初めてのあなたに、……ただ心ばかり、手づくりのおもちゃ手遊品を、七

つ八つごろのお友だち、子供にかえった心持で持参しました。これをば、菊細工、菊人形と、今しがた差出さしでて名告なりはしましたものの、……お話につけてもお恥かしい。中味は安館の駄菓子、まぶしものの、いが細工、餅人形とも称えますのが適當なのでありますよ。」

寛くつろいだ状さまに袖を開いて、胸ななめを斜に見返つた。卓子台ちやぶだいの上に、一尺四五寸まわり白木の箱を、清らかな奉書包ほうしよづつみ、水引みずひきを装つて、一羽、紫の裏うら白蝶しろちようを折つた形の、珍らしい熨斗のしを添えたのが、塵も置かず、据えてある。

穂坂は一度取つて量を知つた、両手にすつと軽く、しかし恭うやうやしく、また押おしいただ戴すえなおいて据直した。

「飛とんでもないお言葉です。——何よりの品と申して、まだ拝見をいたしません。——頂戴をしますと、そのまた、玉手箱以上、あけて見たいのは山々でございました。が、この熨斗、この水引、余りお見事に遊あそばした。どうにか絵の具は扱いますが、障子もはれない不器用な手で、しかもせっかちのせき心、引きむしりでもしましては余りに惜おしい。蟹を噛なんるのは難ですが、優しい娘こですから、今にも帰りますと、せめて若いものの手で扱わせようと存じまして、やつとがまんをしましたほずです。」

——話に機きつかけをつけるのではない。ごめん遊ばせと、年増の女中が、ここへ朱塗の吸物膳に、胡くるみ桃と、鶉つぐみ、蒲かまぼこ鉾のつまみもので。……何の好みだか、金いりの青あおくたに九谷の銚子と、おなじ部ぶ

厚あつな猪口ちよこを伏せて出た。飲みてによつて、器に説はあろうけれども、水引に並べては、絵の秋草もふさわしい。卓ちやぶだい子台の上は冬の花野で、欄らんまごし間越の小春日も、朗ほがらかに青く明るい。——客僧の墨すみ染ぞめよ。

「一いっこん 猷頂戴いそがの口ではいかがですか、そこで、件の、いが餅は？」
一車いそがは急しく一つ手酌して、

「子供のうち大好きで、……いやお話がどうも、子供になります。胎毒たいどくですか、また案じられた種うえぼうそう痘うの頃でしたか、卯辰山うたつやまの下、あの鶯うぐいすだに谷やの、中でも奥の寺へ、祖母ひかに手を引れては参詣さんぎをしました処、山門前の坂道が、両方森しんしん々とした樹立こたちでしょう。昼間も、あの枝、こつちの枝にも、頭ふくろの上で梟ふくろが鳴くんです。

……可こ恐わい。それに歩ある行かせられるのに弱よつて、駄だ々をこねますのを（七なぬか日かまいり、いが餅もち七しちつ。）と、すかさされるので、（七日にちまいり、いが餅もち七しちつ。）と、唄うたに唄うたつて、道みち草くさに、椎しいや、団どん栗くりで数かずとりをした覚さえがあります。それなんですから。……

ほかほかと時しぐれ雨の中へ——餅もちよりは黄わ菊あわの香かで、兎あわが粟あわを搗ついたようにおもしろい。あれはうまい、と言いいますと、電でん車しやを待まちつて雨あめ宿しゆくりをしていたのが、傘かさをざらりと開ひらけて、ああの四よ辻つじを饅まん頭ど屋やへ突つ切きつたんです。——家い内うちという奴やつが、食く意い地ちにかけかけては、娘むすめにまけない難がた物もので、ラジオでも覚さえたんでしよう。球たまも鞠まりも分わらない癖くせに、ご馳ち走そうを取とり込こみせつは相あ競きやうつて、両りやう選せん手て、両りやう選せん手てというんですから。いが餅もち、饅まん頭どの大おほづつみを、山やま媽あば々の籠かごの如ごとく

くに抱いて戻ると、来合わせた電車——これが人の瀬の汐時で、
 波を揉合もみあつていきますのに、晩飯前で腹はすく、寒し……大急ぎで
 乗つたのです。処ところが、並んで真中へ立ちました。近くに居ると、
 頬ほっぺた辺がほてるくらい、つれの持った、いが、饅頭が、ほかりと
 暖い。暖いどころか、あつつ、と息を吹く次第で。……一方が切
 符を買うのに、傘は私が預り、娘が餅の手がわりとなる、とどう
 でしょう。薄ゴオトで澄すましたはいいが、裙すそをからげて、長襦ながじゆ
 袷ばんの紅入べにいりを、何と、引ひきさばいたように、赤うでの大蟹が、籠
 の目を睨んで、爪を突張つっぱる……襟もとからは、湯上りの乳ほどこに、
 ふかしたての餅の湯気が、むくむくと立昇る。……いやアたなび
 く、天津風あまつかぜ、雲の通路かよいじ、といったのがある。蟹に乗ってら、

曲馬の人魚だ、といううちに、その喜見城きけんじょうを離れて行く筈の電車が、もう一度、真下の雨に濺ただよつて、出て来た魚市の方へ馳はしるのです。方角が、方角が違ったぞ、と慌てる処へ、おっぱいが飲みたい、とあびせたのがあります。耳まで真赤になる処を、娘の顔が白澄しろすんで青味が出て来た。狐につままれたか知ら、車掌さん済みませんが乗りかえを、と家内のやつが。人のいい車掌でした。……黙つて切つてくれて、ふふふんと笑うと、それまで堪こらえていたらしい乗客が一いっとき齊わつに哄ふきだと吹出したじやありませんか。次の停車場へ着くが早いか、真暗まつくらさんぼう三宝です。飛降とびおり同然。——処ところが肝心の道案内の私に、何処だか町が分りません。どうやら東西だけは分つているようですけれども、急に暗くなった処へ、ひどい

道です。息休めの煙草たばこの火と、暗い町の燈ひが、うろつく湯気に、ふわふわ消えかかる狐火で、心細く、何処か、自動車、俥くるまやど宿しゆくはあるまいかと、また降出ふりだした中を、沼を拾う鷺さぎの次第——古外ぼん套ぼんは鷺ぼんですか。——ええ電車、電車飛とんでもない、いまのふかし立ての饅頭の一件ですもの。やつと、自動車で宿へ帰って——この、あなた、隣の室まで、いきなり、いが餅つづにくいつくと、あ熱つづ、……舌をやけどしたほどですよ。で、その自動車が、町の角家かどやで見つかりました時、夜目に横町をすかしますと、真向うに石の鳥居が見えるんです。呆あきれもしない、何の事です。……あなたと、ご一つ所しょ、私ども、氏神様の社やしろなんじやありませんか。三羽さんば、羽搔はがいをすくめてまごついた処は、うまれた家の表通りだったのですから

……笑^{わらいごと}事^{こと}じやありません。些^ちと変^へです。変^へに、氣味^{けい}が悪い。
尤^{もつと}も、当地^{こちら}へ着^きますと、直^すぐ翌^{あした}日^ひ、さいわい、誂^{あや}えたような好^{こう}
天氣^{てんき}で、歩^{ある}行くの^のに、ぼつと汗^{あせ}ばみますくらい、雛^{ひな}が巢^ねに返^{かえ}りま
した、お鳥^{とり}居^いさきから、帽^{ぼう}も外^あ套^そも脱^ぬいでお参^まりをしたのです。
が、拜^{きやう}殿^{でん}の、階^{きやう}の、あ^の擬^ぎ宝^{ほう}珠^{しゆ}の裂^ひけた穴^{あな}も昔^{むかし}のまま^まで、この欄^{らん}
干^{かん}を抱^{かか}いて、四^よ五^ご尺^{しゃく}、辻^{つじ}つたり、攀^{よじ}登^{のぼ}ったか、と思^{おも}うと、同じ^{おなじ}
七^{しち}つ八^{はち}つでも、四^よ谷^こあたりの高^{たか}い石^{いし}段^{だん}に渡^{わた}した八^{はち}九^く間^{けん}の丸^{まる}太^{たい}を辻^{つじ}
つて、上^{のぼ}り下^おりをする東^{とう}京^{きやう}は、広^{ひろ}いもの^{もの}です。それ^{それ}だけ世^よ渡^{わたり}りに
骨^{ほね}が折^よれます訳^{わけ}だと思^{おも}います。いや、……その時^{とき}参^ま詣^ぎをしていま
したから、氣^き安^{やす}めにはなりましたもの、実^{じつ}は、ふかし立^たての餅^{もち}
菓子^{かし}と茨^{あざ}蟹^{かに}で電^{でん}車^{しゃ}などは、些^ちと不^ふ謹^{きん}慎^{しん}だつたのですから。」

「それも旅のいっきよう一興。」

と、客僧は、忍辱にんにくの手をさしのべて、年下の画工を、撫でるように言つたのである。

「が、しかし、故郷に対して、礼を失したかも知れません。ですから、氏神、本殿の、名剣宮めいけんぐうは、氏子の、こんな小僧など、何をは勿ねようと、蜻蛉とんぼが飛んでももお心にはお掛けなさいますまい。けれども、境内のお末社まつしやには、皆が存じた、大分だいぶん、悪戯いたずらずきなのがおいでになります。……奥の院の、横手を、川端へ抜けます、あのくらがり坂へ曲る処……」

「はあ、稻荷堂いなりどう。——」

「すぐ裏が、あいもかわらず、崩れ壁の古い土塀——今度見まし

た時も、落葉が堆く、樹の茂りに日も暗し、冷い風が吹きました。幅なら二尺、潜り抜け二間ばかりの処ですが、御堂裏と、あの堀の間は、いかなるわんぱくと雖も、もぐる事は措き、抜けも、くぐりも絶対に出来なかつた。……思出してても気味の悪い処ですから、耳は、尖り、目は、たてに裂けたり、というのが、じろりと視て、穂坂の矮小僧、些と怯かして遣ろう、でもつて、魚市の辻から、ぐるりと引戻されたろうと、……ですね、ひどく怯えなければならぬ処でした。何しろ、昔から有名な、お化稲荷。……」

と、言いかけると、清く頬のやせた客僧が、掌を上げて、またニコリとしながら、頭を一つ、つるりと撫でた。

「われは化けたと思えども、でござろうかな。……彼処あそこを、礼れいさ
ん。」

急に親しく、画工を、幼名おきななに呼びかけて、

「はて、彼処あそこをさように魔所まじよあつかい、おぼけあつかいにされま
してはじや、この似非坊主えせ、白蔵主はくぞうすではなければども、尻尾しつぽが出
そうで、撥くすぐつとうてならんですわ。……口上こうじょうで申通もうしつうじた
ばかり、世外せがいのものゆえ、名刺の用意もしませず——住所もまだ
申さなんだが、実は、あの稲荷の裏店うらだなにな、堂裏の崩くずれ堀ほりの
中に住居すまいをします。」

という、顔の色が、思いなしでも何でもない、白樺の皮に似て、
由緒深げに、うそ寂さびしい。

が、いよいよ柔和に、温容おんようで、

「じやが、ご心配ないようにな、暗い冷い処ではありません——
ほんの掘立ほったての草の屋根、秋の虫の庵いおりではありますが、日向ひなたに小
菊さかりも盛さかりです。」

と云つて、墨染すみぞめの袖を、ゆつたりと合わせた。——さて聞けば、堂裏のそのくずれ塀の穴から、前日、穂坂が、くらがり坂を抜けたのを見たのだという。時に、日あたりの障子の白さが、その客僧の頬に影を積んで、むくむくと白い髯さえ生えたように見える。官吏もした、銀行に勤めもした——海外の貿易に富を積んだ覚えもある。派手にも暮らし、寂さびしくも住み、有為ういてんべん転変の世をすごすこと四十余年、兄弟とも、子とも申さず、唯血族一統の中

に、一人、海軍の中將を出したのを、一生の思出に、出離しゆつりいんと隠遁おんとんの身となんぬ。世には隠れたれども、土地、故郷ふるさとの旧顔ふるがおゆえ、いずれ旅店はたごにも懇意がある。それぞれへ聞合ききあわせて、あまりの懐しさに、魚市の人ごみにも、電車通りの雑沓ざつとつうにも、すぎこしかたの思出や、おのが姿を、化けた尻尾の如く、うしろ姿に顧みかえり、顧み、この宿を訪ねたというのである。

一車なぬかは七日逗留なぬかした。——今夜立って帰京する……既に寝台車も調ととのえた。荷造りも昨夜ゆうべかたづけた。ゆつくりと朝餉あさげを済まして、もう一度、水の姿、山の容すがたを見に出よう。さかり場を抜けながら、おんな婦は、もう座敷を出かかった時であつた。

女中が来て、お目にかかりたいお人がある……香山かやまの宗参そうさん——

——と伝えて、と申されました、という。……宗さん——余りの思おも
掛もけなさに、一車は真昼まひるに碧あおい星を見る思おもがしたそうである。
いや、若わじにをされて、はやくわかれた、母親の声を、うつくし
く、かすかな、雲間から聞く思いがした、と言うのである。玉の
緒いとの糸絶えておよそ幾十年の声であろう。香山の宗さん——自分
で宗さんと名のるのも、おかしいといえはおかしい……あとで知
れた、僧そうめい名な、宗そうさん参さんとの事であるが、この名は、しかも、幼い
時の記憶のほか、それ以来の環境、生活、と共に、他人ひとに呼び、
自分に語る機会と云つては実に一度もなかつた。だから、なき母
からすぐに呼よび続つがれたと同じに思った。香山の宗さん。宗さんと、
母親の慈愛の手から、学校にも、あそびにも、すぐにその年上の

友だちの手にゆだねられるのがならいだったからである。念のためようすに容子を聞くと、年紀としは六十近い、被布ひふを着ておらるるが、出しゆつけ

家のようで、すらりと痩せた、人品じんぴんの好よい法体ほつたいだという。

騎馬の將軍というより、毛皮の外套の紳士というより、遠く消息の断えた人には、その僧そうぎよう形なが尚なお可なつかし懐いい。「ああ、これは

——小学校へ通いはじめに、私の手を曳ひいてつれてつてくれた、

町内の兄哥あにきだ。」と、じとじと声こゑがしめると、立たちがけの廊下らうかか

ら振返かへつて、「おばさんと手をひかれるのとどっち?」「……」

と呆あはれた顔かほして、「おばさんに聞いてごらん。」「じゃあ、私わたしと、

どっち。」どうも、そういう外道げどうは、速すみかに疎遠そゑんして、僧形そうぎようの餓う

鬼大将おにだいちやうを迎むかえるに限かぎる。……。

女どもを出掛けさせ、慌しく一枚ありあわせの紋のついた羽織ひっかを引掛け、胸の紐を結びもあえず、恰あたかも空あいていたので、隣の上段しょうたうへ招じたのであつた。

「——特に、あの御堂おどうは、昔から神体しんたいがわかりません。……第一何と申すか、神名かみながおりなさらないのでありましてな、唯至つて古い、一面の額に、稲荷明神——これは誰が見ても名書であります。惜おしい事に、雨露うろ、霜雪そうせつに曝さらされ、蝕むしばみもあり、その額の裏に、彩色した一叢ひとむらの野菊の絵がほのかに見えて、その一本の根に（きく）という仮名かながあります。これが願主がんしゆでありますか——或は……いや実は仔細あつて、右の額は、私が小庵しょうあんに

預つてありましてな、内々ないないで、因縁いんげんいわれを、臃おぼろげ気ながら存
 ぜぬでもありませんが、日短ひみじかと申し、今夕はおたちと言う、
 かく慌しい折には、なかなか申もうしつく尽つされますまい。……と申す
した下から……これはまた種々しゆじゆお心づかいで、第一、鯛たいひらめの白
 いにもいたせ、刺身を頬張った口からは、些ちと如何どうかと存じます
 ので——また折もありましょうと存じますが、ともかく、祭まつられ
 ましたは、端麗へんれいな女にょたい体たいじゃ、と申します。秘密の儀で。……
 さて、随縁ずいえんと申すは、妙なもので、あなたはその頃、鬼おにごつ
 こ、かくれん坊——勿論、堂裏へだけはお入りなさらなかつたで
 あろうが、軍いくさごっこ。棕櫚しゆろぼうき箒ほうきの朽ちたのに、溝泥どぶどろを搔かきまわ廻まわし
 て……また下水の悪い町内でしたからな……そいつを振ふりまわ廻まわす

のが、お流儀でしたな。」

「いや、どうも……」

「ははは、いやどうも、あの車がかりの一術ひとてには、織田、武田。

……子供どころか、町中が大辟易だいへきえき。いつも取鎮め役とりしずが、五つ、

たしか五つと思います、年上の私でしたな。かれこれ、お覚えはあるまいけれども、町内の娘たちが、よく朝晩、あのお堂へ参詣をしたものです。その女体にあやかつたのと、また、直接に申すのも如何いかじゃけれど、あなたのお母さんが、ご所有だった——参勤交代の屋敷方は格別、町屋には珍らしい、豊国、国貞の浮世絵——美人画。それを間まさえあれば見あつに集まる……と、時に、その頃は、世なみがよく、町も穩おだやかで、家々が皆相応にくらしていました

から、縞しま、小紋、友染ゆうぜん、錦絵の風俗を、そのまま誂あつらえて、着もし、着せたのでもありました。

江戸絵といった、江戸絵の小路こうじと、他町たちょうまでも申しましたよ。またよく、いい娘さんが揃そろっていました。（高松のお藤さん）

（長江のお園さん、お光みつさん）医師いしやの娘が三人揃そろって、（百合さん）（婦美ふみさん）（皐月さつきさん）齒はを染めたのでは、（お妾のお妻

さん）（割鹿わりかの子このお京さん）——極彩色の中の一人、（薄墨の絵のお銀さん）——小銀こぎんのむかし話を思わせます——継子ままごではないが、預り娘の掛かかり人ゆうどい居そうろう候う。あ、あ、根雪の上を、その雪

よりも白い素足で、草履ぞうりばきで、追立おったて使いもちいに、使いもちあるき。それで、なよなよとして、しかも上品でありました。その春の雪の

ような膚はだへ——邪慳じゃけんな叔父叔母に孝行な真心が、うつすりと、

薄紅梅の影になつて透すきとお通る。いや、お話し申すうちにも涙が出

ますが、間もなくあわれに消えられました。遠国へな。——お覚

えはありませんか、よく、礼さん、あなたを抱いた娘ですよ。」

「済まない事です——墓も知りません。」

一車が、聞くうちに、ふと涙ぐんだのを見ると、宗参は、急に

陽気に、

もつと「尤も……人形が持てなかつた、そのかわりだと思えば宜よろしい。」

「果報うらやまな、羨うらやましい人形です。」

「……果報な人形は、そればかりではありません。あなたを、なめたり、吸つたり、負おぶつてふりまわしたり——今申したお銀さん

は、歌麿の絵のようななよなよ嫺々とした娘でしたが、——まだ一人、色白で、少しふとり肉で、あだ婀娜な娘。……いや、また不思議に、町内の美しいのが、揃って、背戸、庭でも散らず、名所の水の流ながれをも染めないで、皆他国の土となりました。中にも、その婀娜なのは、また妙齡から、ふと魔に攫さらわれたように行方が知れなくなりましたよ。そういう、この私にしても。」

手でおさ压えた宗参の胸は、庭の柿の梢が陰翳かげつて暗かった。が、溜息は却って安らかに聞こえつつ。

「八方、諸国、流転の末が、一頃、黒姫山の山家やまがざい在の荒寺に、堂守坊主で居おりました時、千箇寺せんがじまいり、一人旅の中年の美麗な婦人——町内の江戸絵の中と……先まず申して宜しい。長旅わづらの煩い

を、縁あつて、貧寺ひんじで保養をさせました。起臥おきふしの、徒然つれづれに、

水引みずひきの結び方、熨斗のしの折り方、押絵など、中にも唯今の菊細工

——人形のつくり方を、見真似みまねに覚えもし、教えもされたのが、……かく持参おもちやのこの手遊品おもちゃで。」

卓上を見遣みやつた謙讓な目に、何となく威いが見える。

「ものの、化身ほんけの如き、本家の婦人の手すさびとは事かわり、口すぎの為とは申せ、見真似まねの戯れ仕事ざし。菊細工というが、糸だか寄切よせぎれだか……ただ水引を、半輪はんわの菊結び、のしがわりの蝶の羽には、ゆかり香かを添えました。いや、しばらく。ごらんを促したようようで心苦しい、まずしばらく。

——ところ処で、めいけんじんじや名劍神社前の、もとの、私どもの横町の錦絵の

中で、今の、それ、婀娜一番、というしまだまげ島田鬻を覚えていらつし

やろう。あなたの軒のきならび三軒目——さよう、さよう、さよう、さよう、

それ、前夜、あなたが道を違えて、捜したとお話しのじゃ。唯今の自動車屋が、裏へ突つきぬ抜けにその娘の家でありますわ。」

「ええ、松村の（おきい）さん。」

と、いつて、何故か、はつと息を引いた。

「いや、あれは……子供が、つい呼びいいので、（おきいさん、

おきいさん）で通りました。実は、きく、本字で（奇駒きく）とよま

せたのだそうでありましたが、いや何しろ——手たづなぞめ綱染はなびらに花片

の散った帯なにかで、しごきにすずを着つけて、チリリン……もの

静かな町内を、あの娘があるくと直ぐに鳴った——という育ちだから、お転婆てんばでな——

何を……覚えておいでか知らん、大雪の年で、廂ひさしまで積つた上を、やがて、五歳になろうという、あなたを、半てんおんぶで振ふるつて歩行あるいた。可厭いやだい、おりよう、と暴れるのを揉もんで廻まわると、やがてお家の前うちへ来たというのが、ちようど廂、ですわ。大おおな声で、かあちゃん、と呼ぶものだから、二階の障子あが開く。——小菊を一束、寒中の事ゆえ花屋の室むろのかこいですな——仏壇へお供えなさるのを、片手に、半身はんしんで立ちなすつた、浅葱あさぎの半襟で、横顔が、伏目は、特にお優しい。

私は拝借の分をお返ししながら、草双紙くさごうしの、あれは、白縫しらぬい

でありましたか、釈迦しゃかはつそう八相はつそうでありましたか。……続きをお借り

申そうと、行きかかった処ところでありました。転婆娘てんぱにやうが、（あの、白

菊きくと、私の黄わうぎくと、どっちがいい、ええ坊ぼうや。）——礼れいさん、

あなたが、乗のり上あがつて、二階にがいの欄干らんかんへ、もろ手を上げて、身みもだ

えをしたとお思いなさい。（坊主ぼうしゆになつて極樂ごくらくへおいで、）と云

つた。はて——それが私わたしだと、お誂あつらえでありましたよ。」

ちよつとととば
一寸言ことばを切きつた。

「……：……いうが早いはやいか、何なにと、申じやうだん戯ごにも、脱だつけかかつた脊筋せききんか

ら振ふ上げるように一振いちふり振ふつたはずみですわ！……：……いいかげん揉も

抜みぬいた負おんい紐ひもが弛ゆるんだ処ところへ、飛とび上あがろうとする勢いきおいで、どん、と肩

を抜ぬけると、ひっくりかえつた。あなたが落ちた。（あら、地獄じごく）

と何と思つたか、お奇駒さんが茫然と立ちましたっけが、女の身にすれば、この方が地獄同様。胸を半分、膚が^{はだ}_{すべ}に^{はだ}_{すべ}つて、その肩、乳まで、光つた雪よりも白かつた。

雪の上じや、些^{ちつ}とも怪我はありませんけれども、あなた、礼坊は、二階の欄干をかけて、もんどりを打って落ちたに違わぬ。

吃^{びっくり}驚^{おと}して落^{おと}しなすつた、お母さんの手の仏の菊が、枕になつて、ああ、ありがたい、その子の頭に敷きましたよ。」

慄^{ぞつ}然と、肩をすくめると、

「宗さん、宗さん。」

続けて呼んだが、舌が硬ばり、息つぎの、つぎざましに、猪^{ちよこ}口
の手がわなわなふるえた。

「ゆ、ゆめだか、現うつつだかわかり兼ねます。礼吉が、いいかげん、

五十近いこの年でありませんと、いきなり、ひっくりかえって、

たちどころ

立たちどころ 処からだに身体からだが消えたかも分りません。またあなたが、忽たちまち光ここ

うみよう かくよう

明 赫かくよう 耀として雲にお乗りになるのを視みたかも知れません。

また、もし氏神の、奥境内の、稻荷堂うらの塀の崩れからお出で
 になったというのが事実だとすると……忽ちこの天井。」

息を詰めて、高く見据えた目に、何の幻を視たろう。

「……この天井から落葉がふって、座敷が真暗になると同時に、

あなたの顔……が狐……」

おだや

「穏おだやかならず、は、は、は、おだや 穏おだやではありませんな。」

「いいえ、いや。……と思うほど、立処に、私は気が狂ったかも

知れないと申すのです。」

「また、何故なぜにな。」

「さ、そ、それというのがです。……というのがです。」

「ままま一いっこん献けんまいれ。狐坊主、昆布こぶと山椒さんしよで、へたの茶の真似

はしまするが、お酌の方は一いっこう向こうなものじゃが、お一つ。」

「……気つけと心得、頂戴します。——承りました事は、はじめ
てで、まる切り記憶にはないのですけれども、なるほど伺えば、
人間生涯のうちに、不思議な星に、再び、出逢う事がありそうに
思われます、宗さん……

——お聞き下さいまし——

落着いて申します。勿論、要点だけですが、あなたは国産の代

理店を、昔、東京でなすつておいでだったと承りますし……そんな事は、私よりおくわ悉しいと存じますが、浅草の観世音に、旧、九月九日、大抵十月の中なか旬過なぎになりますなが、その重ち陽ようの節せつ、菊の日に、菊供養というのがあります。仲見世、奥山、一帯に売ります。黄菊、白菊、みな小菊を、買つていらつしやい、買つていらつしやい、お花は五銭——あちの、些ちと騒々しい呼声さえ、花の香かを伝てえるほどです。あたりを静しずかに、圧おえるばかり菊かの薫かで、これを手てに持もつて参まつて、本堂に備そえますと、かわりの花を授さつて帰かりますね。のちに蔭かげ干ぼしにしたのを、菊枕、枕の中へ入れますと、諸病を払うといふのです。

二階の欄干へ飛ぼうとして、宙に、もんどりを打つて落ちて、

小菊が枕になつたという。……頭から悚然ぞつとしました。——近頃、
信心しんじんぎ気……ただ恭敬きやうけい、礼拝らいはいの念の、薄くなりはしないか
と危ぶまれます、私の身で、もし、一度、仲見世の敷石で仰向け
に卒倒そたうしましたら、頭の下に、観世音の菊も、誰の手の葉も枝も
なく、行倒ゆきだおれになつたでしょう。

いえ、転んだのではないのです、危あぶなく、怪しく美しい人を見て、
茫然となつたのです。大震災の翌年奥山のある料理店やに一寸ちよつとし
た会合がありました、それへ参りましたのが、ちようどその日、
菊の日に逢まいました。もう仲見世むかへ向むかいますと、袖と裾と襟と、
まだ日本鬻まげが多いのです。あの辺、八分まで女たちで、行くのも、
来るのも、残らず、菊の花を手てにしている。折からでした、染模

様になるよう、颯さつと、むら雨さめが降りました。紅梅こうばい焼やきと思うのが、
 ちらちらと、もみじの散るようで、通りかかった誰わりかの割わり鹿かの子こ
 の黄金きんの平打ひらうちに、白露しらつゆがかかる景氣けいきの——その紅梅こうばい焼やきの店みせの
 前まへへ、お参まいりの帰かえりみち、通りがかりに、浅葱あさぎの蛇目傘へびめがさを、白い手
 で、菊きくを持添もえながら、すつと穿すほめて、顔を上げた、ぞつとする
 ような美人めいじんがあります。珍めづらしい、面長めんちやうな、それは歌麿かまろの絵え、と
 いったいい媚なまめかしい中うちに、うつとりと上品じやうひんな。……すぼめた傘かさ
 は、雨が晴はれたのではありません。群集ぐんしゆで傘かさと傘かさが洩しぼも紺かきも累な
 合あつたために、その細こい肩かたにさえ、あがきが要いつたらしいので。
 ……いずれも盛装せいさうした中に、無雑むざつ作さくな櫛くし卷まきで、黒くろ縷ろ子じゆの半襟はんせき
 が、くつきりと白い頸えり脚あしに水際みづぎはが立たつのです。藍色あいらがかつた、

おぶい半纏ぼんでんに、朱鷺色ときいろの、おぶい紐を、大きく結ゆわえた、ほんのふだんふだんぎき不斷着と云った姿。で、いま、傘をすぼめると、やりちがえに、白い手の菊を、背中の子供へさしあげました。横はに匆はねて、ずり下おりる子供の重みで、するりと半纏の襟すべが亘ると、肩から着くずれがして、緋ひを一文字つッに衝つッと引いた、統ぬめのような肌がが。」

「ははあ——それは、大宇宙の間に、おなじ小さな花が二輪咲いたと思えば宜しい。」

と、いう、宗参の眉しまが緊しまつた。

「鬢びんのはずれの頸えりあし脚あしから、すつと片乳かたちの上、雪の腕かいなのつけもとかけて、大きな花びら、ハアト形の白雪を見たんです。」

——お話につけて思うんです。——何故なぜ、その、それだけの姿

が、もの狂おしいまで私の心を乱したんでしようか。——大宇宙に咲く小さな花を、芥子粒ほどの、この人間、私だけが見たからでしような。」

「いや些ちと大きな、坊主でも、それは見たい。」
と、宗参は微笑ほほえんだ。

障子の日影は、棧をやや低く算かぞえ、欄間らんまの下に、たとえば雪の積ったようである。

鳥影が、さして、消えた。

「しかし、その時の子供は、お奇駒さんの肌からのように落ちはしません。が、やがて、そのために——絵か、恋か、命か、狂気か、自殺か。弱輩もうしぶんな申分もうしぶんですが、頭を搔かきむし筆むしるようになりま

して、——時節柄、この不景気に、親の墓も今はありません、この土地へ、榮耀えいようがましく遊びに参りましたのも、多日しばらく、煩わづらいました……保養のためなのでした。」

「大慈大悲だいじだいひ、觀世音かんぜおん。おなくなりの母ぎみも、あなたにお疎うとしかろうとは存ぜぬ。が、その砌みぎり、何ぞ怪我でもなさったか。」

「否いや、その時は、しかも子供に菊を見せながら、艶えんに莞爾にっこりしたその面影ばかりをなごりに、人ごみに押隔おしへだてられまして、さながら、むかし、菊見にいでたつた、いずれか御簾ごれんちゆう中の行列、最後の腰元の中へ、棕鳥むくどりがまぐれたように、ふらふらと分れたんです。」

それ切きりですが、続けて、二年、三年、五年、ざっと七年目に当

ります、一昨年のおなじ菊の日——三度に二度、あの供養は、しぐれ時で、よく降ります。当日は、びしよびしよ降ふり。誰も、雨支度で出ましたが、ゆき来の菊も、花の露より、葉の雫しずくで、気も、しつとりと落着いていました。

ここぞと、心も焦こげつくような、紅梅焼の前を通過とおりすぎて、左側、銀花堂といいましたか、花はな簪かんざしの前あたりで、何心なく振向くと、つい其処、ついうしろに、ああ、あの、その艶えん麗れいな。思わず、私は、突きのめされて二三間前げんへ出ました。——その婦人が立っていたのです。いや、静しずかに歩行あるしています。おなじ姿で、おぶい半纏ほんてんで。

唯、背負紐おぶいひもが、お待ち下さい——段々だんだんに、迷いは深くなる

ようですが——紫と水紅色ときいろの手綱染たづなぞめです。……はてな、私をおぶった、お奇駒さんの手綱染を、もしその時知っていましたら……」

「それは、些ちとむずかしい。」

「承った処では、お奇駒さんの、その婀娜あだなのと、もう一人の、お銀さんの、品よく澄んで寂さびしいのと、二人を合わせたような美しさで、一いっとき時に魅入ったのでしよう。七年めだのに、些ちっとも、年を。」

無論、それだけの美人ですから、年を取ろうとは思いません。

が、そのおぶってる子が、矢張り……と云つて、二度めの子だか、三度目だか、顔も年も覚えていません。

——まりやの面おもてを見る時は基督キリストを忘却する——とか、西洋でも言うそうです。

右になり、左になり、横ちがいに曲ゆがんだり、こちらは人をよけて、雨の傘からかさ越こしに、幾度いくたびも振返る。おなじ筋を、しかし殆ど真直に、すつと、触るものがないように、その、おぶい半纏の手綱染たづなぞめが通りました。

普請中——唯今は仮堂です。菊をかえて下おりましたが、仏前では逢あいません。この道よりほかにはない、と額下かくぼしの角柱かくばしらに立つて、銀杏いちようの根をすかしても、矢大臣門やだいじんもんを視ながめても、手水ちようず鉢ぼちの前を覗のぞいても、もうその姿は見えませぬ。——

ぶっしんえんまんむはいそう
仏身円満無背相。

じつぼうらいにんもんまんめん
十方来人聞万面。」——

宗参が、

「げ実に、げ実に。」

おもてと面を正して言った。

「正面の、左右のれん聯のげ偈を……失礼ながら、嬉しい、御籤みくじにして、おもい思の矢のまと的に、線香のたなびく煙を、中の唯一ひとすじ一条、その人の来る道と、じつと、時雨しぐれにも濡れず白くほろほろとこぼれるまで待ちましたが、すれ違い押合う女おんなづれ連にも、ただ袖の寒くなりますばかり。そのでんぼういん伝法院の前を来るまでは見たのですのに、あれから、弁天山へ入るまでの間で、消えたも同じに思われました。」

宗参の眉が動いた。

「はて、通り魔かな。——或^{ある}類^い属^{ぞく}の。」

「ええ通り魔……」

「いや、先^まず……」

「三度めに。」

「さんど……めに……」

「え。」

「なるほど。」

「また、思いがけず逢いましたのが、それが、昨年、意外とも何とも、あなた！……奥伊豆の山の湯の宿なんです。もう開^{ひら}けていて、山深くも何ともありません、四五^{たびゆきな}度行^な馴^なれておりますから、谷も水もかわった趣と云ってはありますが、秋の末……もみじ

頃で、谿河たにがわから宿の庭へ引きました大池を、瀬になつて、崖づくりを急流で落ちます、大巖おおいわの向うの置石おきいしに、竹の樋といを操あやつつて、添水そうず——僧都そうずを一つ掛けました。樋の水がさらさらと木の剣りめへかかつて一杯になると、ギアながれと流へこぼれます、拍子を取つて、突尖とつさきの杵形きねがたが、カーン、何とも言えない、閑しずかな、寂さびしい、いい音がするんです。其処へ、ちらちらと真紅まっかな緋葉もみじも散れば、色をかさねて、松杉の影が映さします。「はあ、添水——珍らしい。山田守もる僧都の身こそ……何とやら……秋はてぬれば、とう人もなし、とんと、私の身の上でありませんが、案山子かかし同様の鹿おどし、……たしか一度、京都、嵯峨なの某なにがしじ寺の奥庭で、いまも鹿がおとずれると申して、仕掛けたのを

見ました。——水を計りますから、自おのずから同じ間をもつて、カーンと打つ……」

「慰なぐさみに、それを仕掛けたのは、次平じへいと云つて、山家やまがから出ました
 が、娑婆しゃぼ気つけな風呂番で、唯扁ひらつた平たいい石いしの面めんを打つだけでは、
 音が冴さえないから、と杵きねの当ります処へ、手頃な青竹の輪りんを置
 いたんですから、響ひびいて、まことに透するのです。反橋そりはしの渡り廊下
 に、椅子に掛けたり、欄干らんかんにしゃがんだりで話したのですが、風
 呂番の村の一つ奥、十五六軒の山家おおきには大いおほいのがある。一昼夜に
 米を三斗五升つ搗うく、と言いいます。暗やみの夜にも、月夜にも、添水番
 と云つて、家々から、交代で世話をする……その谷川の大杵かけひ添水
 笕かけひの水の小添水は、二十一秒、一つカーンだ、と風呂番が言いま

すが、私の安やすづもりで十九秒。……旦那、おらが時計は、日に二回、東京放送局の時報に合わせるから、一厘りんも間違わねえぞ、と大分大形おおがたなのを出して威張る。それを、どうこうと、申すわけではありませんけれども。」

「時に、お時間は。」

「つれのものも販もとりません。……まだまだ、ご緩ゆつくり——ちようど、お銚子しやうしのかわりも参りました——さ、おあつい処を——

——で、まあ、退屈たいくつまぎれに、セコンドを合わせながら、湯宿ゆじやくの二階にがいの、つらつらと長い廻まわり縁えん——一方ひかたの、廊下らうか一つ隔ひてた一棟ひとむねに、私の借かりた馴染なじみの座敷ざしきが流ながれに向むかいた処ところにあるのです——この廻縁まわりのえんの一廓ひとくわくは、広く大々だいたいとした宿しゆくの、累かさなり合あった棟むねの真まんな

中かどころ 処かどころ にありまして、建物が一番古い。三方縁で、明りは十分に取れるのですが、余り広いから、真中、隅々、昼間でも薄暗い。……そうでしょう、置敷居おきしきいで、間まを劃しきつて、道具立ての襖きが極まれば、十七室ま一いつとき 時に出来るまと云いますが、新館、新築で、ここを棄おてて置おくから、中仕切なかじきりなんど、いつも取払おつて、畳数およ凡そ百五六十畳と云う古御殿です。枕を取おつて、スポンジボオル、枯おれなくていい、万年いけの大松を抜おいて、（構まえました、）をお行やる。碁盤、将棋盤ぶんどを分捕ぶんとつて、ボツクスとと称となえますね。夜具蒲団の足場で、ラグビイの十チイムひねりあも捻ひねりあ合あおう、と云う学生の団体たいでもないと、殆ほとんど使つかつた事ことがない。

行く度に、私は其処そこが、と云つて湿ぬりくさい、百何十畳ではな

いのです。障子外の縁を何処までも一直線に突^{つき}当^{あた}つて、直角に折れ曲つて、また片^{かた}側^{がわ}を戻つて、廊下通りをまたその縁へ出て一廻り……廻ると云うと円^{まる}味^みがあります、ぎくり、ぎゆうぎゆう、ぐいぐいへ行つたり、来たり。朝掃除のうち、雨のざんざぶり。夜、女中が片づけものして、床^{とこ}を取つてくれる間、いい散歩で、大好きです。また全館のうち、帳場なり、客^{きやく}室^まなり、湯殿なり、このくらい、辞^じ儀^ぎ、斟^{しん}酌^{しやく}のいらぬ、無^む人^{にん}の境^{きよう}はないでしょう。

が、実は、申されたわけではありませんけれど、そんならと
 いて、瀬の音に、夜寝られぬ、苦しい真夜中に其処を廻り得るか、
 か、というど、どういたして……東から南へ真直の一^{ひとえん}縁^{えん}だつて、

いい年をしながら、不気味で足が出ないのです。

峰の、寺の、暮六くれむつの鐘が鳴りはじめた黄昏たそがれです。樹立こだちを透

かした、屋根あかりに、安時計のセコンドを熟じっと視みる……カーン、

十九秒。立停たちどまつたり、ゆっくり歩行あるいたり、十九秒、カーン。

行ったり、来たり、カーン。添水そうずばかり。水の音も途絶とつえました。

欄干らんかんに一枚かかった、朱葉もみじも翻ひるがえらず、目の前の屋根に敷いた、

大おお櫂おけの落葉おちも、ハラリとも動かぬのに、向う峰の山やま風おろしが

颯さつときこえる、カーンと、添水かすかが幽かすかに鳴ると、スラリと、絹摺きぬずれ

の音がしました。

東の縁の中ごろです。西の角から曲って出たと思う、ほんのり

と白く、おもながな……」

「……………」

「艶々とした円髷まるまげで、子供を半纏はんでんでおぶったから、ややふつ

くりと見えるが、背のすらりとしたのが、行違ゆきちがいに、通りざま

に、（失礼。）と云つて、すつとゆき抜けた、この背負紐おふいひもが、

くつきりと手綱染たづなぞめ——あなたに承る前に存じていたら——二階

から、私は転げたでしょう。そのかわりに、カーン……ガチリと
時計が落ちました。

ところ

処ところが——その姿の、うしろ向きに曲る廊下が、しかも、私の座

敷もつとみまの方、尤も三室並んでいるのですが、あと二室ふたまに、客は一人も

居ない筈、いや全く居ないのです。

変じゃありませんか、どういふものか、私の部屋へ入ったよ

うな気がする、とそれでいて、一寸、足が淀みました。

腕組みをせずかかと舐ると、もとより開放したままの壁に、真黒な外套が影法師のようにかかつて、や、魂が黒く抜けたかと吃驚しました。

床の間に、雁来紅を活けたのが、暗く見えて、掛軸に白の野菊……蝶が一羽。」

と云いかけて、客僧のおくりものを、見るともなしに、思わず座を正して、手をつくすと、宗参も慇懃に褥を辻つたのである。

「——ですが、裏階子の、折曲るのが、部屋の、まん前にあって、穴のように下廊下へ通うのですから、其処を下りた、と思えば、それ切の事なんです。」

世にも稀な……と私が見ただけで、子供をおぶった女は、何も、観世音の菊供養、むら雨さめの中をばかり通るとは限らない。

女中は口が煩うるさい。——内証ないしよで、風呂番に聞いて見ました。——

——折から閑散期……というが不景気の客ずくなで、全館八十ばかりの座敷数かずの中に、客は三組みくみばかり、子供づれなどは一人もない、と言います。尤も私もつとがその婦おんなにすれ違ちがった、昨きのうの日は、名古屋か

ら伊豆まわりの、大がかりな呉服屋が、自動車三台で乗込んで、年に一度の取引、湯の町の女たち、この宿の番頭手代、大勢の女房娘連づれが、挙こぞつて階下したの広間あつまへ集あつまりましたから、ふとその中うちの一人かも知れない、……という事で、それは……ありそうな事でした。

た。——

別して、例の縁側散歩は留められません。……一日おいて、また薄暮合うすくれあい、おなじ東の縁の真中の柱に、屋根の落葉と鼻を突合つきあわせて踞しゃがんで、カーン、あの添水そうずを聞き澄すんでいたのです。カーン、何だか添水の尖とがった杵きねの、両方へ目がついて、じろりと此方こちを見るように思われる。一人で息をしている私の鼻が小鳥くちばしの嘴くちばしのように落葉をたたくらしく、カーン、奥歯が鳴るような、夕迫るものの氣勢けはいがしますと、呼吸で知れる、添水のくり抜きの水が流ながれを打って、いま杵が上って、カーン、と鳴る。尖とがって狐に似た、その背に乗って、ひらりと屋根へ上って、欄干またを跨またいだように思われるまで、突然、縁の曲まがり角かどへ、あの婦おんながほんのりと見えました。」

「添水に、婦おんなが乗りましたか、ははあ、私が稲荷明神の額裏がくうらを背負しょつたような形に見えます。」

寸時しばらく、顔を見合せた。

「……ええ、約束したものに近寄るように、ためらいも何も敢あえてせず、すらすらと来て、欄干に手をついて向う峰を、前髪に、大櫂はんてんに、雪のような顔を向けてならんだのです。見馴れた半纏はんてんを着ていません。鎧よろいのようなおぶい半纏はんてんを脱いだ姿は、羽衣はつゆいを棄てた天女あまのむすめに似て、一層いつそうなよなよと、雪身せつしんに、絹糸きんいとの影かげが絡まつたばかりの姿。帯おビも紐ひもも、懐紙かいし一重ひとえの隔へだてもない、柱はしらが一本あるばかり。……判然はつきりと私わたしは言ことばを覚えています。

——坊ちゃん……ああ、いや、お子さんはどうなさいました。

——うっちゃって来ました。言うことをきかないから。……子

どもに用はないでしょう——

と云つて、にっこり莞爾としたんです。

宗さん。

——菩薩と存じます、魔と思います——

いうが早いか、猛然と、さ、どろろ気が狂ったのか、分りませんが、踊りかか躓つて、白い頸くびを抱きました。が、浮いた膝で、使つかい古ふるしの箱火鉢を置き棄てたのを、したたかに踏ふんで、向うのめに手をついた、ぱつと立ったのは灰ですが、唇には菊の露を吸いました。もう暗い、落葉が、からからと黒く舞つて、美人は居

ません。

這うよりは、立つた、立つより、よろけて、確たしかに其処へ隠れたろうと思う障子一重ひとえ、その百何十畳の中を、野原のように、うろつく目に、茫々ぼうぼうと草が生えて、方角も分らず。その草の中に、榜示杭ぼうじくいに似た一本の柱の根に、禁厭ましないか、供養か、呪詛のろいか、線香が一束、燃えさしの蠟燭が一挺ちよう。何故か、その不気味さといつてはなかつたのです。

部屋へ皈かえつて、仰向けに倒れた耳に、添水そうずがカーンと聞こえました。杵の長い顔が笑うようです。溪流の上に月があつて。――

また変に……それまでは、二方にほうに五十六枚ずつか――添水に向いた縁は少し狭い――障子が一枚なり、二枚なり、いつも開いて

いたのが、翌日から、ぴたりと閉りました。めったに客は入れないでも、外見上、其処は体裁で、貼りかえない処も、切張きりばりがちやんとしてある。私は人目を憚はばかりながら、ゆきかえり、長々とした四角なお百度をはじめめるようになったんです。

——お百度、百万遍、丑うしの時とき参まゐり……ま、何とも、カーン、

添水の音を数取りに、真夜中でした。長い縁は三方ともに真の暗やみです。何里歩行あるいたとも分らぬ気がして、一まわり、足を摺すって、手探りに遙々はるばると渡つて来ますと、一步上へ浮いてつく、その、その踏心ふみごころ地。足が、障子の合せ目に揃えて脱うわぞういだ上草うわぞう履りにかかった……当たったのです。その踏心ふみごころ地。ほんのりと人肌のぬくみがある。申すも憚はばかられますが、女と一つ衾しとねでも、この時

が交つて、がやがやと女中たちが入りを出入りをしました。買込んだ呉服の嬉しさ次手に、箆筒を払った、隙ふさげの、土用干の真似
 なんでしよう。

活花いけばなの稽古の真似もするのがあつて、水際、山やまふところ懐なつかにいく
 らもある、山菊、野菊の花も葉も、そこここに乱れていました。

どの袖、どの袂から、抜けた女の手ですか、いくつも、何人も、
 その菊をもつて、影のようにゆききをし出した、と思う中うちに、ふ
 つと浮いて、鼻筋も、目も、眉も、あでやかに、おぶい半纏ぼんてんも、
 手綱染たづなぞめも、水際の立ったのは、婀娜あだに美しい、その人です。

どうでしょう、傘からかさまで天井に干した、その下で、熟じつと、此方こつちを、
 私を見たと思うと、撫なでがた肩かたをくねつて、媚なまめかしく、小菊の枝で一

寸あやしなから、

——坊や——（背に子供が居ました。）いやなおじさんが……
あれ、覗く、覗く、覗くよう——

と、いう、肩ずれに雪の膚はだが見えると、負おぶわれて出た子供の顔が、無精髻はやを生した、まずい、おやじの私の面つらです。莞爾にこりとその時、女が笑った唇が、縹はなだい色いろに真青に見えて、目の前へ——あの近頃の友染ゆうぜんむき向むきにはありませんよう、雁来紅はげいとうを肩から染めた——釣り下げた長襦袢ながじゆばんの、宙にふらふらとかかった、その真中へ、ぬつと、障子一杯の大きな顔になって、私の胸へ、雪の釣鐘ほどの重さが柔々やわやわと、ずしん！ とかかった。

東京から人を呼びます騒ぎ、仰向けに倒れた、再び、火鉢で頸ぼ

んのくぼ
窪を打ったのです。」

「また、お煩わづらいになるといかん。四十年来のおくりもの、故わざと持参しましたが、この菊細工の人形は、お話の様子によつて、しばらくお目に掛けますまい。」

引抱ひっかかえて立つた、小脇の奉書包は、重いもののように見えた。宗参の脊が、すつくと伸びると、熨斗のしの紫の蝶が、急いで包んだ風呂敷のほぐれめに、霧を吸つて高く翻ひるがえつたのである。

階子段はしごだんの下で、廊下を舐もじる、紫のコオトと、濃いお納戸にすれ違つたが、菊人形に、気も心も奪われて、言ことばをかける隙ひまもない。玄関で見送つて、尚なおねだりがましく、慕つて出ると、前の小

川に橋がある。門かどの柳の散る中に、つないだ駒はなかつたが、細せ流せらぎを織る木の葉はは、手綱たづなの影を浮かして行く……流ながれに添はつた片側はるばるの長い土塀えきろを、向うに隔たる、宗参法師は、間近ながら遙々はるばると、駄路えきろを過ぐる趣して、古鼠の帽子の日向ひなたが、白髪しらがを捌さばいたようである。真白な遠山の頂いただきは、黒髪くろがみを捌さばいたような横雲の見えがくれに、雪の駒の如く駈けた。

名剣神社の拝殿には、紅あかの袴はかまの、お巫子みこが二人、かよいをして、歌の会があつた。

社務所で、神職たちが、三人、口を揃えて、

「大先生だいせい。」——

この同音は、一車を瞳どうじゃく若わかたらしめた。

「大先生は、急に思おも立いたつたとありまして……ええ、黒姫山へ——もみじを見に。」——

「あら、おじさん。」

娘の手が、もう届く。……外套の袖を振切つて、いか風のぼりが切れたように、穂坂は、すくと深しんこう更の停車場に下りた。急行列車が、その黒姫山の麓ふもとの古駅こえきについて、まさに発車しようとした時である。

その手が、爛かんをつけてくれた魔法瓶、さかなにとて、膳ぜんのをへずった女房の胡桃くるみにも、且かつ心を取られた、一いっしょ所にたべようと、

今しがた買った姫上川の鮎ひめかみがわの鮎なれずしの熟鮎なれずしにも、恥はづべし、涙なみだぐまし
 い思おもをしつつ、その谿谷けいこくをもみじの中へ入いつて行く、残のこりの桔
 梗きやうと、うら寂さびしい刈萱かるかやのような、二人の姿の、窓あかりに、暗
 くせまったのを見つつ、乗放のりはなして下おりた、おなじ処ところに、しばら
 く、とぼんと踞しゃがんでいた。

しかし、峰やまを攀よじ、谷やまを越こえて、大宗参だいそうさんの菊細工きくさいこうを見ること
 が出来たら、或あるは、絵えのよい題材たいざいを得えようも知しれない。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 泉鏡花集 黒壁」ちくま文庫、筑摩書房

2006（平成18）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

初出：「文藝春秋」

1932（昭和7）年1月号

入力：門田裕志

校正：坂本真一

2015年10月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

菊あわせ

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>